

凡例

- 1 本冊子は『夕づゝ』第四号の墨書きの本文及び朱書きの批評の全文を掲載順に翻刻し、適宜、註釈と解題を加えたものである。
- 2 翻刻部分は本文、批評とも枠で囲んだ。
- 3 原本で朱書きの箇所は翻刻でも朱とした。
- 4 口絵のカラー写真からもわかるように、各作品とも墨書きの作品本文の後に他の同人等による朱書きの批評が続き、それとは別に本文上の欄外の随処に朱で評が書き込まれ、本文にも朱で圈点やゴマルビが付されている。それらのうち、欄外評については、翻刻本文の欄外に「*3」のように*と数字でその位置だけを示し、評の内容は作品本文及び批評の後に一括して掲げた。また本文中の傍点の類については、傍点の種類や色を原文通りに印刷することが困難なので、翻刻本文では一様に墨傍点とした上で、下の欄外に※を付し、それがいかなる種類や色の傍点であるかを註記した。
- 5 翻刻担当者によって註釈が付された語句または箇所は、翻刻本文の下の欄外に◎を付してそれを示し、註釈は翻刻の後に一括して掲げた。
- 6 各作品の翻刻・註釈・解題の担当者の名は目次及び各作品の扉に掲げた。
- 7 翻刻に当っては出来る限り原文を重んじたが、新字体のある漢字は原則として新字体を用い、略字・俗字などの異体字、変体がない、合字などは原則として現行の字体、表記に改めた。
- 8 明らかな誤字はへ、脱字は「」で補った。
- 9 句読点は原文のままとしたが、難読のおそれがあるときは適宜直した。
- 10 無署名の欄外評で、筆者が推測できるものは、末尾に黒字の「」を付して補った。
- 11 解読できない文字は□で示し、推測できる場合はへ、内に補ったが、無理な推測は避けた。

翻刻・註釈・解題
『夕づゝ』
第四号
目次

はじめに

..... 1

凡例

..... 2

『夕づゝ』第四号 目次

[翻刻等担当者]

大海原

古城生

樋渡隆浩 8

闇 (課題文学の一)

二十五弦生

杉尾志帆 32

花物語

星郊生

加藤 大 40

草紅葉

菊村

甘利香織 54

宵闇 (課題文学の二)

夕晴子

大城奈央 68

朝と夕

白狼

杉尾志帆 84

闇 (課題文学の三)

膽山生

八木 淳 92

夜長

夏子

趙 秀娟 104

雨の和田峠

ふた夜

鈴木孝尚 116

闇 (課題文学の四)

星郊

樋渡隆浩 136

夢うつゝ

疎嵐

鈴木理香 144

闇 (課題文学の五)

古城生

森 洋介 168

消息欄

同人

青木裕二 174

中村蓊日記抄 明治三十五年四月～三十六年七月

曾根博義……………

187

同人筆名一覽

〔本号における主な筆名〕

古城、古

二十五絃、ふた夜、白狼、白

星郊、ふじ子、星、明星愛読者

蓊村、膽山、疎嵐、山、としえ、山子

夕晴、夏子、夕

〔前号における他の署名〕

元

生田星郊、望蜀山人

としえ女史、膽嶺、嶺

夕せい、明星愛読者

〔後の主な筆名〕

栗原古城

森田草平

生田長江

中村古峽

梧桐夏雄

〔本名〕

栗原元吉

森田米松

生田弘治

中村蓊

五島駿吉

夢うつゝ

疎嵐

翻刻・註釈・解題
森洋介

ゆめうつゝ、

疎嵐

〔未定稿〕

(上)

『貴方まあ、どう遊ばしたんで御坐います、……綿入れなんど、お着になつて?』

お重は呆気にとられて、中の格子戸に手を掛けたまま佇立つてゐる。

骨もかなめ要も折れんばかり、はた／＼と扇使ひしながら門口を入つて来たのは年の頃三十許の、骨

格の逞ましい、丈のすらりとした、併し顔色の嫌に青白い男、寒暖計は彼是九十度にもならうと

いふ、此の暑さに、之れは亦どう考へたものか、ふく／＼と綿の膨らんだ銘仙の綿入に、下はネ

ルのしやつまで着込んで、剩へ、見るも苦しや、釦まできちん厳密とかけて。

釘付でもされたやうに鴨居側で立ち止まつて、瞠然と今の問の何を意味するやを考へてるかのや

う、暫し首俛れたまゝ、沈んで見えたが、やがて腹の底から出たかとも思はるゝ、意味なき高笑

をして、又俄かに面相変へて

『姉様! 兄貴は?』

声は如何にも重く響いた。

此の様を眺めて居たお重は、何か心中に思ひ当る処ある如く、独り打ち頷いて、深く先きの問を
発したのを悔ゆるやう見えたが、わざと言葉を柔らげて、『あの主人やどのは、今朝程俄かに所要が出来まして、町まで参りましたので御坐います、どうせ今*
3* 2
* 1

◎佇立つて

◎九十度

◎瞠然

◎首俛れた

* *
7 6

* *
5 4

晩は得戻らぬやうに申して居りましたが……でもまあ貴方、這麼所ではお暑くていけませんから、何卒お上り遊ばしませ、別坐敷の方は、これでもいくらか、風通りがよう御座いますから、』

お重は急ぎ井戸傍へ駆けて行つて、鉄桶に清水を汲んで来た。

『貴方、一寸お足でも、お拭き申しませう』

男は憚る気色も、否む様子も見えず、丁度稚児が、母親にでも対するやうに、両足差延ばしたまゝ、女のするがまゝに任せてゐる、こは又如何に両手合せて、眼光据えへゑて、訳の分らぬことを、口に唸やきながら――、

お重は右の足拭き終つて、左の足をふと見れば、膝頭の下の所が、白い布もて、緊しく縛つてある、ハテナア

『貴方、これは、どうか遊ばしたので御座いますか』

『はゝゝゝゝ、どうも、若い時分、柔術をやりました、怪我した傷が、昨日あたりから非常に痛み出しまして、時々血まで出て困ります、はゝゝゝゝ』

余り答の意外なのに、お重は凝として、

『おやまあ、それはどうも、お困りでいらつしやいませう、血止膏薬でも、おつけ申しませうか』

といひながら、そと布を解いて見れば、おぞまじや、傷は愚か、蚤の喰跡、一、つさへ、見えない。!

別坐敷へ上りて後も、帯を解いて肌寛がんとせせず、亦例の両手合せて眼光据えへゑて、口を嚙へたまゝ、念ずるが如く、思ふ所あるが如く、熟と庭園の一隅を熟視てゐるのを、お重は真正面

※傍点赤ゴマ、

※圈点・は赤
◎緊しく

◎凝として

※傍点赤ゴマ、

◎嚙へた

※傍点赤ゴマ、

*
8

にも得見ず、横眼に窃と眺めながら、気の毒に堪へぬといふ面持で、額に汗をたら／＼流してゐる、

やがて綿入男の噤んだ口は、頬のあたりから、崩れ掛り、次第に眼瞼の緩むよと見えたが、みる／＼黙思の相貌は一変して、又意味のなき高笑となつた、されど其れも只瞬時の間で、再び眼据はへわり、口緊りて、岐とお重を睨め付けた其眼光は如何にも凄かつた。

『姉様！ 兄貴は？』

『はい、主人は、急に用事が出来まして、今朝程、宿りがけで、町まで……』

声は氈へてゐる、

『姉様、私、今日は兄貴に尋ねたいことがあつて、参りました……』

驚くお重に用捨なく、愈言葉を鋭くいつた、

『兄貴は昨夜、真夜中に私の所へ、毒を飲ませに来ました！』

之を聞くとお重は恰かも電気にも打たれ「た」かのやう、慄ひ上つた。顔の色は、土よりも青く変り、全身が身の毛立つて、頭から冷水でも浴せられたやう、体内の血液は悉く心臓へ凝結して仕舞つて、頓には言葉さへ出ない、タラ／＼と流れ出た腋下の冷汗が横腹を伝うて流れ落つるに驚いて、彼は再び吾にもあらず身戦ひした、

『貴方亦御戯談を仰つて……主人は昨夜、宵の口から内にばかり居りましたものを』
必死の勇を揮うて漸く口を開いたのであるが、其声は聞き取れぬまで乱れて居た、

◎口緊りて
◎岐と

※傍点赤ゴマ、

※傍点赤ゴマ、

◎頓には

* 9

折りしも遊びに飽きて帰つて来た四五歳ばかりなる男の児が、鼻を鳴らしながら、甘つたるい声で
『お母様、なんど！ え、なんど頂戴な』
と這入つて来たが、偶然、向ひに坐つてゐる男を見るや否や、俄かにおびえ畏れて、お重の袖へ
縋り付いた、

* 10

『ム、坊か、大きくなつた、どれ抱つこしてやらう』

* 11

『それ小父さんが抱つこして上げやへよう、うまいことね、行つといで！』

児供にへは、急に大きな声で泣き出して、愈母親の袖に噛み付いた。

『嫌だ、狂気の小父様、怖い、怖い、!!!』

(下)

あゝもう考へまい、く、いくら考へたとて、今の吾力では如何ともすること出来ない、お重
は勤めて思ひ出すまいとするほど、『姉様！ 兄貴は昨夜、毒を飲ませに来ました』と昼の言葉
がありくと、まだ耳の底に動いて居て、どうしても眠られない！

* 12

仮令、この言葉は、彼の病気にはよくある疑察の念から出たとするも、自分にはどうしても、其
れと思はれない、——どうして其れと思はれやうか？ そりやア、あの病気のことなれば随分無
理もいほう、乱暴もしやへよう、偶には此間のやうに、刀振り廻して、大道を狂ひ駆けること
もあらう、しかし如斯して隠居屋敷の方へ、殆ど牢屋同様に、終日終夜、閉ち込めてあることな

※傍点赤ゴマ、

※傍点赤ゴマ、

※傍点赤ゴマ、

* 1 8
* 1 7
* 1 5

* 1 1 3
* 1 4 3
* 1 6

* 1 9
* 2 0

れば、さして外へは累を及ぼすやうなこともあるまいに、余り乱暴だから毒を少しづつ飲ませて、
 身体を衰よわらせる……嗚呼思ひ出して、戦慄ぞつとする、虫、獸類けだものにならばいざ知らず、之れが吾々人
 間同志に向つて出来ることであらうか!?
 今更いふも甲斐なきことながら、あゝ姉様が生きてさへ下されば斯様なことにはならなかつたら
 うに、姉様が死なくなり遊ばしたばかりに、幼い時からの約束が全く外はずれ、自分は遂に姉様の候補
 として、泣く／＼も今の方と連れ添うへふことになった、自分でさへ其のことを聞いた当坐は、
 悲しくて／＼寧ろ澗川へでも身を投げて果てやへようかとまで思つた位だもの、況して幼い時
 分から自分を可愛がつて下すつた、彼あの方の落胆は如何であつたらう！ 漸くのこと、おあき
 らめ遊ばして、母方様の御親族へ御養子あにゐへい、らつしやることゝなつたが、僅か二月と経つ
 か経たぬに、飛んでもない不意の、あの御病氣！
 素もとより病氣は如彼あした大層な御心配事が、原因であつた為とはいへ、自分の気の弱味からして自
 分の所為が其幾分を手伝つてゐるやうに思ひ做あされて堪へられぬ、なることならば一月でも、
 二月でも、否一年でも一生でも、自分の力の及ぶ限り、自分の命のあらん限り介抱あもして見た
 い、看病もさせて頂きたい！
 其れに内かたの方の御仕打は!!! ……あゝ思ひ出す度に腸も断たれるやうな感じがする、これでも兄
 弟といへやへようか、よし、痛めたお腹は違ちがう、へふとも生れ落つるから一つ家に育つて来たもの
 を、病氣となつては、尚更、一層弟御を劬いたはりてやり給ふが兄様たるものゝ義務でもあらうもの

※圈点・は赤○

※傍点、は赤く

※傍点赤ゴマ、

※傍点赤ゴマ、

※圈点・は赤○
 ※「自分の力」以
 下に重ねて傍点赤
 ゴマ、

※傍点赤ゴマ、

を……たま／＼胸の心底を打ち明けて諫めに掛るときは、女の癖に差し出るな！ まだ那樣奴に未練が残つてゐるかとはしたなき雜言、あゝ自分は、どうして、斯様な鬼のやうな方を、夫と呼ぶねばならぬ不幸に生れたか、あゝ生き甲斐のないこと、寧ろ、もう世を捨てた方が……と苦しまぎれに、寝がへりうてば、無心に眠る傍の小児が眼につく、お重の胸の中は千々に乱れて、とつおいつ、心の煩悶は其れから其れへと独樂の如く回つたが、昼の疲れに何時の間にやら、うと／＼とした折りしも、表の戸荒らかに叩きて、看護にと附け添へたる権助、ひた走りに駈け来り、『奥様、たゝた、大変で御坐ります、若旦那様が今し方、血をどつさりとおはきになつて……』エッ！と吾知らず声を立て、驚き醒むれば、胸の動悸は早鐘をつくやう、両の拳は開かぬまでに握りしめ、全身は流汗に浮き上がらんばかり、！ 心は猶も落ち付き兼ね、若しやと立ち上がりて、蚊帳を出やへようとするれば、玄関に下女が戸を開ける音！ ヤレ喜しや、今のは正しく夢であつたかと、安堵の溜息つく其下から、やがて此の夢を現に見ねばならぬかと思へば、お重は胸も搔裂かれる心地して得堪へず其場に泣き崩折れた。

(六月二十八日草稿)

附記。有体に白状すれば此篇(篇)は今暑中休暇に想を構へしもの、書き終りて読み直し見れば、拙劣粗笨いふに堪へず、尚幾多の推敲の要すべきものあるを知れり、而も幾度か捨てんとして終に爰に出す所所(所以)のもの、唯本誌が前二号に比し大に紙数の劣るあらんを恐れてなり、豈他意あらんや、豈他意あらんや、

ずーっと始めからよむできて、さてこれから大に理くつをこねやへようと思つたら附記と云ふ中に大へん謙遜した断わりがきがあるので折角の理屈も吐き出す所がなくなつてしまった、唯此

※傍点赤ゴマ、

※圈点・は赤○

※傍点赤ゴマ、

* 2 2

作は作者自身の自白する如く後姿や、闇等に比しては甚だ見劣りするのは事実である、たゞ狂人と毒薬とに驚かされてあつと曰つたぎり全体の関係は曖昧で一向要領を得ない、作者の防禦線が充分だから先づ此位でよして置かう

(古城)

狂人をうつすなどは、余程難事だから、前のより見劣りせらるゝのも致し方があるまい。今前(迄)のところ個様な小説は、この作者の独り舞台となつて仕舞つた。作者の意気愛すべしぢや。今に三百円の懸賞小説に、きつと当撰するから、今のうち、セツ／＼と折角の御勉強をなさるがいゝ。

夕晴

成程是は設計がちと大き過ぎた為めに作者が持てあましてる様が歴々見える。しかし僕は此半ば要領を得ないやふ(へう)な事柄の中に何となく捨て難い所があるやふ(へう)に思ふ。是は或は此中のある事から聯想して古き記憶でもそれとなく自ら呼び起したせい(ゑい)かも知れぬ

いかにも以前に比ぶれば此作者の会話は余程上達せられたらしい。全時に亦弦齋的な所の少くなつたのは大に祝すべしぢや。

(星郊)

誰か云ふこの作を以て前々の作に劣れると、然り或は推敲の点に於て、描写の点に於て至らざる所あらむ。されど此篇を以て其結構、関係を曖昧なりと云ひ棄つる古城子に至つては、夫子自ら何うかしてしてゐるにあらざるか、他の二人、就中作者自身迄が、此篇を蔑視せるに至つては、我は此点に於てこそ一驚を吃したれ。膽山子よ、余は誠を云へば此篇に接して始めて兄が純客観詩人としての価値を見出したるなり。君が取材の何ぞ奇警にして鋭きや。此篇、柳浪の河内屋と亀さんとを打して一丸となしたる傾きありと雖、人生の尤悲酸なる神秘に触れ、深酷骨に徹する

◎後姿や、闇

◎三百円の懸賞小説

◎弦齋的

◎河内屋と亀さん

趣あり。若しこの篇の材料、結構をして、数年前の観念小説の亜流なり、陳腐なりとなす者あらば、そは、スコットのレーデーラブゼレーキを以て清新に非ずとして一概に斥くるが如き、定見なき、一時の風潮に左右せらるゝ軽浮者流ならむ。蘇国詩人のこの傑作が英語の存せむ限り生命を有すべきものとすれば、百年の後に伝はるべき詩は、誠にこの「ゆめうつゝ」の如き人生胸臆の奥秘に触れたる名篇ならずして何ぞや。余は切に、膽山兄のこの羨むべき沈痛の結構を放棄したる事の余りに早きを惜しむ。若し今少し句を練り字を改めたらんには、描写にして、今少し改跚（刪）を加へたらんには、近年希に見る傑作にやなりぬらむを、返す／＼も惜しむべきかな。

余は潜にこの天才ある客観詩人の生先きを饒（翹）望し、且つ君の今少し行文に注意して敲（推）に忠実ならん事を望む、君が取材の才能は之をか疎（ホ）ン（粗笨）なる描写の塵の中に遺棄すべく、余りに惜しき名什ならずや、至囑、々々 （白狼）

◎レーデーラブゼレーキ

◎至囑

欄外評

- * 1 未定稿とはあまり聞かぬ言葉なり〔星郊?〕
- * 2 なによく流行つたのよ、尻切れとんぼと云ふ事で推敲を経てないからまづいのは御免といふ意が裏にこもつてをる〔古城?〕
- * 3 何だか始めから意表外で毒気をぬかれた〔古城?〕
- * 4 このあたりの描写の如何にうまきよ〔白狼?〕
- * 5 かくして、狂気となりし我いとしの男の足を拭きやるが、せめてものお重の心なぐさ「め」ならずや。〔白狼?〕
- * 6 馬鹿々々しい
- * 7 こいつは、一寸妙だね、何だか狐にでもつまゝれる様な気がしたから、眉に、つばをつけて読みなほす〔夕晴〕
- * 8 これ亦意表外〔古城?〕
- * 9 東京では、なんどではなく、なんぞと云ひます〔夕晴〕
- * 10 兄の子なる小児を点綴せし事の如何に深酷なるよ〔白

- 狼?〕
- * 11 このあたりの言を発するお重が心中の苦悶は如何に、〔白狼?〕
- * 12 お重の苦悶はいかに〔白狼?〕
- * 13 此毒が前に説明がないからお重の驚方が余りぎやう山に思はれた〔古城?〕
- * 14 更に又意表外〔古城?〕
- * 15 吾はハムレット想ひ起しぬ
- * 16 是非この事情は前に説明して貰い（ひ）たい、それではなかりや、前の一段が更に要領を得ぬのみか、興味を減ずる事実に移しい〔古城?〕
- * 17 読者をして、意外、唐突の感あらしめしもの皆この罪なり〔古城?〕
- * 18 又意表外だの奇妙だのと勝手な御托（託）を並べてゐる方々は是非今一度初めから読み直して貰い（ひ）たい〔白狼?〕

*19 このあたり、誠に人間の声、女の声、靈性の声を暴露したるもの

心に忘れ兼ねたる古傷ある我は、思はず巻を蓋ふへうて泣けり。字々皆涙、句々皆血、彼の嘲弄的評を弄するものは誰ぞ、何等の無情漢ぞ。我は今夜、久しく乾きたる我涙穴に、心ゆくばかり、涙を溢らし得たるを喜ぶ。〔白狼？〕

*20 意気愛すべしじへちや〔夕晴〕

*21 この辺は皆圈点を打つべし。作者の描写に至りては感服の外なし〔夕晴〕

*22 夕晴の口わる驚くの外なし〔白狼？〕

*以下、森擔當箇所は、翻刻以外、擔當者の平生の表記方針により正字歴史的假名遣（拗音促音は小書き）とす。

註釋

【佇立つて】「つったって」と訓む。中村古峽『殻』（春陽堂、一九一三年）に「佇立つた^{つた}」といふ用例あり。

【九十度】當時の溫度單位は華氏（F）で、華氏九十度は現行の攝氏單位に換算して約36℃の眞夏日になる。

【瞠然】原稿は目偏に旁を夢に作るが、「瞠」の誤字と見做した。菅の俗字で、儂に通ず。音はボウ、くらい意の字。通常は茫然（呆然、バウゼン）と書く所をやや術學的に表記しようとしたか。

【首俛れた】俛はふせる・うつむく意があり、「うなだれた」と訓まれる。なほ「俛首れる」と宛てた例ならば森田草平『煤煙』長田幹彦「濼落」等に見られる（現代言語セミナー編『辞書にない「あて字」の辞典』（講談社+α文庫）、一九九五年、参照）。

【緊しく】「きびしく」と訓まれる。森鷗外『即興詩人』徳富蘆花『思出の記』等に用例がある。

【凝として】「ぎよっとして」と訓ませるか。

【噤へて】「くはへて」と訓ませるか。「噤」の訓みは通例「つぐむ」。「くはへる」の用字は通例「啞・銜・啣」。

【口緊りて】「くちしまりて」と訓む。廣津柳浪「今戸心中」夏目漱石『明暗』等に用例がある。

【岐と】「きつと」乃至「きと」と訓ませるか。「きつと」の宛字は「屹度」が多く「佶と」と宛てる例もあるが（杉本つとむ編『あて字用例辞典 名作にみる日本語表記のたのしみ』雄山閣、一九九四年、参照）、「岐と」の例は不詳。

【頓には】「すぐには」と訓ませるか。通例「頓に」で「とみに」と訓み、急に・たちどころにの意。

【後姿や、闇】いづれも「ゆめうつゝ」の作者・中村翁（古峽）の作品名。「うしろ姿」は『夕づゝ』前第三號にてとしえ女史の筆名で書いた小説。「闇」は『夕づゝ』本第四號の課題文學の一として膽山の筆名で寄せた小説。

【三百圓の懸賞小説】前年（一九〇一年）七月に『大阪毎日新聞』が六千號記念に募った懸賞小説の第一等が三百圓といふ高額賞金だった。翌一九〇二年中村春雨（吉藏）『無花果』が入選作とされて同紙に連載、デビューを飾ってゐる。これに續けの意か。

【弦齋的】村井弦齋を指す。一八六三〜一九二七、小説家、報知新聞編輯長。同紙連載の『日の出島』は一八九六（明治二十九年）以來六年に亙り、恰度この一九〇二年に完結してゐる。後世名高い『食道樂』も翌一九〇三年初版刊行。評家からは藝術性の乏しさを批判されながらも大衆讀者に支持され、人氣の絶頂にあつた。「弦齋的」とは通俗小説風に墮するを警告した語だらう。

【河内屋と龜さん】共に廣津柳浪作。「龜さん」は一八九五年十二月『五調子』發表、白癡の青年が主人公。「河内屋」は一八九六年九月『新小説』發表、兄弟で従姉妹とそれぞれ婚約してゐたが、兄の婚約相手たる従姉の病死により弟の妻となる筈であつた従妹が兄の妻となり、弟と兄嫁となつた従妹とは、懊惱する。即ち、狂人を出した所が「龜さん」、かつての許嫁同士の従妹と義弟といふ人物設定が「河内屋」、この兩者を掛け合せた趣きと評する。「河内屋」に就ては、まだ單行書に収録してなかつたが、この一九〇二年五月九日附の作者中村古峽の日記に「柳浪河内屋をよむ」とある。「數年前の觀念小説の亞流なり」云々は、一八九五、六年頃の川上眉山・泉鏡花らの作風が觀念小説と呼ばれたのによるが、廣津柳浪の諸作はその流れから出て深刻小説・悲惨小説と稱されたのは文學史上周知の通りで、ここでは觀念小説の語が柳浪ら深刻小説をも含む概念にされてゐる。

【レーデーラブゼレーキ】“The Lady of the lake”は、Sir Walter Scott（一七七一〜一八三二）作の長篇敘事詩。「蘇國詩人のこの傑作」とも言ふは作者の出身がスコットランド（蘇格蘭）であることより。鹽井雨江が『今様湖上乃美人』（開新堂書店、一八九四年）の題で譯刊してゐたが、一高の英語の授業で「湖上の佳人」を讀んでゐることが中村古峽日記の翌一九〇三年一月以降に確認できる。白狼（森田草平）はふた夜の筆名で『夕づゝ』本號に寄せた「雨の和田峠」中でも「かの蘇國にありと聞く、ロツクカトリン湖にや似たる」と舞臺であるカトリン湖（Loch Katrine）を比喻に折り込む程で、この騎士道物語に大分熱を上げたらしく見える。

【至囑】大いに望みをかけること、非常に有望なこと（三省堂編修所編『三省堂新国語中辞典』三省堂、一九六七年第一刷、による）。

解題

習作「ゆめうつゝ」から『殻』その他の短篇へ

——中村古峽における狂氣と文學的事象

署名「疎嵐」は本名・中村蓊、後年の中村古峽の筆名の一つである。この一九〇二（明治三十五）年、本『夕づゝ』第四號發行（一月末出來）の前々月に『牟婁新報』に九月二十四日から掲載した紀行文「湘南悠游録」で既に「疎嵐生」と署名してゐた。さらに翌年『新佛敎』三月號に「放鼠記」を疎嵐の署名で載せたが、その外にこの名を用ゐた例は見つかっていない（曾根博義編「中村古峽著作年表」『変態心理』と中村古峽「不二出版、二〇〇一年、参照。疎懶（ソラン／なまけ）をもちつた自嘲の戲號でもあらうか。

標題「ゆめうつゝ」は目次では「夢うつゝ」と標記される。いづれにせよ、この短篇の末尾から取つた語であること一讀瞭然だらう。謂はゆる、夢オチ。作者本人も冒頭「〔未定稿〕」と大書し附記に「拙劣粗笨」と辯疏して頻りに卑下する。實は、古峽の同年の日記には七月一日「朝「夢うつゝ」清書して萬朝報に投書す」とあり、『萬朝報』の「毎週懸賞小説」に應募してみたものの「懸賞小説駄目落膽す」（七月七日）といふ結果だったのである（『萬朝報』の懸賞小説については、紅野謙介「懸賞小説の時代」『投機としての文学 活字・懸賞・メディア』新曜社、二〇〇三年、に詳しい）。それで自信を無くしたものか。朱で書き込まれた同人からの評も概して厳しい。

しかし、狂人に材を取つたところは興味深い。既に「あたかも作者の『殻』以後の作品や、文学から精神医学、変態心理学への轉身を予言しているかのような不思議な小説である」との評がある（曾根博義「回覽雑誌『夕づゝ』の出現——百年前の一高の文学青年たち」『文学増刊 明治文学の雅と俗』岩波書店、二〇〇一年十月）。といふのも、中村古峽は文學史上纔かに『殻』一作を以て名を留めるマイナー作家であるが、その『殻』（春陽堂、一九一三年初版）は次弟義信の狂死をめぐる事件を小説にした自傳的長篇であった。背景には兄弟の確執があったこと、曾根博義「中村古峽と『殻』」『研究紀要』第五十七號、日本大学文理学部人文科学研究所、一九九九年一月）に詳しい。豫言といふのは、この時期まだ弟の精神異常は現れてなかつたからである。その間の経緯を今のところ最も詳しく述べた曾根博義「中

村古峽の履歴」〔新編 中原中也全集 別巻(下) 資料・研究篇〕角川書店、二〇〇四年)から引いておかう。

次弟義信が古峽を頼って上京するのは、古峽が一高三年になった秋、「夕づゝ」第三号と第四号が出る間の明治三十五年十一月である。「……」その弟に、軍隊の訓練から帰った後、精神異常の徴候が現われたので、母たちのいる郷里奈良に帰省させ、精神病院に入院させたのは、弟の上京四年後の明治三十九年のことだったようだ。「……」

古峽が当時は一口に精神病と呼ばれていた諸種の精神疾患や、変態心理と呼ばれていた異常心理現象に関心を向けるようになったきっかけは、身内の弟に起こったこの思いがけない事件にほかならない。「……」

「……」弟義信が兄を頼って上京して来た直後の明治三十五年一月に出た回覧雑誌「夕づゝ」第四号に、古峽はすでに、兄が自分を毒殺しようとしていると訴える狂人の弟を描いた言文一致小説「夢うつゝ」(未定稿)を「疎嵐」の名で発表しているのだ。

末尾には「六月二十八日草稿」とあり、この暑中休暇に想を構えた拙劣粗笨な作品だと附記している。「……」『殻』ではカインとアベルに擬えられる兄と弟の間の宿命的な対立と抗争は、弟の発病前、上京前から予感されていたのかもしれない。

圖らずも中村古峽の傳記といふ物語における伏線になってをり、後になって顧みれば思ひ當るべき物語の胚珠があるといふわけだが、狂人を扱ったことの興味深さといふのはそれだけではない。以下「ゆめうつゝ」本文を順に逐って見てゆくとしよう。

まづ異様な男が登場する。その風體に始まる種々の異常さの描寫がいささか唐突で突拍子も無いため、欄外評で「意表外」といふ文句が繰り返されるわけだらう。たしかに、血が出たと言ふので足の繃帯を解いてみたら傷すら無いといふくんだり等、情報が蓄積されて漸進的に事實が明らかになりゆくといふリアリズムの常道を期する讀者にとつては一種の前言取り消し (palinode) として逆機能するから、「狐にでもつまゝれる様な気がした」(欄外評*7)と評されるのも無理ないのかしれぬ。リアリズムに反する異常さを描くと寫實主義から逸脱しかねぬといふ難關。後評に「狂人をうつすなどは、餘程難事だから」と夕晴(梧桐夏雄)がいふのはこのことか。當時の文學論用語で言へば「うつす」、即ち「描寫」の問題であるが、だがこれはそれ以上に、敘述の順序に關する、説話論的ナラトロンジカルな問題なのである。

さて異様は異様でもしかし行文上は狂人であることは未だ判然としてゐないその男が、嫂に向かつて兄が自分に毒を飲ませにきた

と訴へる。嫂は愕きを抑へて御冗談をと打ち消す。そして、折しも歸つて來た幼い甥っ子に「狂氣まじがひの小父様」と呼ばれるところで(上)が了る。男の異常さを察知させながら明言するのは最後にまで引き延ばす宙吊り技法。「裸の王様」よろしく、子供ならではの直言に事態を露呈させて幕を引くわけだ。斯くて今や狂人たることが明かされた以上、ここから當然、毒云々の唐突な告發は狂氣ゆゑの妄想かと先読みされよう。實際、常識から云つて家族に服毒させるなぞ信じ難いことだし、現に(下)に入り、嫂であるお重のくどき、(心内語の獨白)が長なが續いて(一種の後説法として)義弟との關係や事ここに至る事情が自づと明かされる中でも、毒を飲ませられたといふ狂人の「この言葉は、彼の病氣にはよくある疑察の念から出たとするも、自分にはどうしても、其れと思はれない」と述べられてゐ、迫害妄想とする豫測を裏付けてくれる(但し「其れとは思はれない」は取りやうによつては二重の意味を持ち得るもので、毒云々の言葉を否認して狂つた「疑察」に過ぎぬと言ふのか、狂人の言葉が「疑察の念」とは思はれず事實だと言ふのか、「其れ」の指す範圍がどちらか曖昧である)。ところが、すぐ後に「餘り亂暴だから毒を少しづつ飲ませて身體を衰よわらせる……嗚呼思ひ出してぞつとも戦慄とする」ともあり、今度は、毒を飲ませてゐることは(お重には)信じたくないことではあつても既定事實になつてゐるやうなのだ。これは、敘述の混亂ではないか。なればこそ、正しくこの箇所にも同人たちからの欄外評(*133~138)も集中してゐるのである。

さらに後段に至ると、まどろんでゐたお重は、義弟が血を吐いたとの知らせに目を醒まされて驚愕することになる。が、すぐそれも夢であつたと判る。またしても、前言取り消し。しかし「やがて此の夢を現うつに見ねばならぬかと思へば」云々と結ばれるのだから、どうやら狂人が毒を飲まされてゐることだけはやはり事實であるらしい。だが斯くも二轉三轉されては事實(≡物語内容)の解讀に苦しむわけで、作者の不手際による敘述の混亂と見られても致し方あるまい。とはいへ本文テキストに即す限りは、混亂してゐるのは無人稱の語り手ではなく焦點人物(≡反射人物リフレクター)のお重と見るべきこと、作者を必要以上に貶めぬために附言しておかねばなるまい。語りがお重に焦點化しつつそれで以て狀況説明をも兼ねさせようとしてゐるために、煩悶する彼女の混亂が反映して讀者に物語狀況の認知を混亂させてしまふのだ。

しかしながら、ここで星郊(生田長江)の評に藉口すれば、「此半ば要領を得ないやふな事柄の中に何となく捨て難い所がある」と見ることも出来るのではないか。つまり面白いことに、疑心暗鬼を生じて妄想に驅られてゐるのは、狂人の義弟よりむしろお重その人であるかに見えるのだ。狂人よりも、狂人を想ふ人の方が狂つてゐる——少なくとも心理的に錯亂しつつある。この(下)での一人稱的敘法による亂れた心理の眞實味リアリティーに比すれば、(上)での三人稱的にただ外觀のみ描かれた狂人のあからさまな狂態は取つてつ

けたやうな支離滅裂ぶりで拵へ物臭くさへ感じられる。そして今や（下）の終幕において、夢と現と、妄想と現實とを分かつ筈の意識までもが曖昧に混濁し出す——恰も（上）から（下）へ、狂人から彼女へと、狂氣の感染が起ったかの如く。そしてそれが反映して讀者にとつても何が何やら判らなくなつてゆき、さらなる狂氣の輪が擴がる……？　もし、さういつた心理的戰慄の方向を作者がもつと追究してゐたら、「ゆめうつゝ」は所謂「奇妙な味の短篇」として玩味すべき小品に仕上がつてゐたかもしれないのだ。

以上はいささか強引な讀みに思はれるかしのれない、——まだ中村古峽が漱石門下ともなつてゐない一高時代の習作に、『夢十夜』から内田百閒に至る「夢幻系列」（高橋英夫）に參ずることを求めようといふのは。作者自身、狙つた展開ではあるまい。しかし中村古峽が書いた幾つかの狂人ものの系列において見るならば、その可能性は認めてよいのではないか。こんな機會でも無ければ滅多に言及されることすらあるまいから、後年古峽が發表した諸作を併せて検討してみる。

うち『殻』についてはさすがに唯一の代表作だけあつて大分批評があり、『殻』再刊本（方丈社、一九二四年）に附載された三十八頁に及ぶ「小説『殻』批評集」で讀める。好評を博したと言へるが、材料自體の迫力に頼つて作者が事實に負けてゐるとの批判もあつた。小宮豐隆の「中村古峽君の『殻』」（『時事新報』一九二三年八月十四・十五日）もそれ。小宮の評は、八十年振りに『殻』が全文收録された『編年体 大正文学全集 第二卷 大正二年』（ゆまに書房、二〇〇〇年）の解説でも竹盛天雄が引いて要約してゐる。即ち、「作者その人が『殻』を着ており、その梓の中にとどまつて弟や母・妹たちと立ち会つてゐる点に問題があるという」旨を指摘するもので、「作者が「……」自分を強者として自分を正しきものと思惟してゐる」ゆえの「材料」へのかかわり方の弱さをみているのだ」と（どうしたことかこの小宮の『殻』評に就き竹盛は初出を記し忘れ、曾根博義編「中村古峽 参考文献目録」（前掲『変態心理』と中村古峽』所収）にも漏れてゐる。それが作者古峽自身のエゴイズムの投映であることは、兄弟牆かきに關せめぐ葛藤を傳記的事實から跡づけながら曾根博義が論じた通り（前掲「中村古峽と『殻』」）。ここから作者の倫理性や作品の文學性を論ふ方向もあらうが、端的にはそれも描寫において現れるはずで、説話論的な問題として捉へられよう。例へば作者が主人公の兄に即き過ぎてゐるとは、語り手が焦點化をする敘法の問題だ。また常人が狂氣に至る徑路を描いて迫真だと稱讚される一方、それがあまりに他人の眼からの描寫であることが難點に擧げられる。だが果して、客觀的描寫にとどまらず發狂した弟の内面まで踏み込んでいったとしたら、『殻』の成功はあり得たらうか。それでは作者は『殻』を小説として破綻させてしまはないか。その頃小説の視點論を研究してゐた評家に中村星湖がゐて（藤井淑禎「多元描寫の試みと挫折」『小説の考古学へ——心理学・映画から見た小説技法史』名古屋大学出版会、二〇〇一年、參照）、星湖は『殻』に就て「稔といふ長男

の追懐の體で書いて行くうちに、次男爲雄の心裡にも、母親その他の心裡にも立入つて書いた所がある、それが形式上の缺點（「紹介」『早稲田文學』一九一三年六月號）と指摘してゐたが、作全體を通して見れば焦點人物は基本的に主人公・稔になつてをり、弟や母に焦點を移すことはあつても概して外的焦點化で、殊に弟に對しては心中まで立ち入つた視點は殆ど取ることがない。實際、作中の壓巻と評價される弟爲雄の狂想にしても、弟が語るのを精神病院に面會に來た兄が聴くといふ形で敘述され、鉤括弧に括られ、畢竟、狂人と距離を取つた兄の視線の優位は確保されてゐる。その迫力と言ふのも、單に形式上から見れば、弟の訴へが延々と且つ一方的に語られるが故に直接話法の括弧が外れたかのやうに錯覺させ自由直接言説（『内的獨白』）めいた効果を生じたからで、作者の巧んだ手柄ではあるまい。中村星湖は別の所では『殼』の作者が、全然爲雄の立場に立つて、もしくは爲雄の心裡に立入つて、あの作を書き上げたならば、「……」ゴリキイやアンドレエフの失敗（『狂人心理の誇張・想像』）を繰返すことに終つたかも知れない。爲雄の狂氣の發作を外から描いたといふ事が、眞實を描く爲めには餘儀ない手段であつて「等とも説く（『殼』に就いて）『新小説』一九一三年九月號）。もし、より内的に狂人に焦點化して語らせたならば、恐らく古峽の技倆ではこの「ゆめうつゝ」の如く、どうも曖昧で要領を得ないと評される出來になつてしまつたことだらう。逆に、さうしなかつたからこそ『殼』は古峽にとつて唯一例外的に成功した小説だつたのだ。とはつまり、讀むに堪へる客觀性を維持し得たといふ程のことだが。

成功しなかつた、埋もれた狂人ものの作品と照らし合せてみよう。刊行された『殼』は好評だつたが後が續かず、夏目漱石に原稿を持ち込んで斷られたりした経緯は曾根博義「異端の弟子——夏目漱石と中村古峽——（下）」（『語文』第百十四輯、日本国文学会、二〇〇二年十二月）に述べられてゐる。一九一六年（大正五年）八月、漱石に閲讀を乞つた小説二篇が酷評されたことは、『漱石全集』収録の二十四日附中村翁宛書翰によつて知られ、同論はそこから「二つの小説のうち最初の赤子殺しの小説が中村古峽著『變態心理の研究』（大正八年十一月、大同館書店刊）の「下篇 病院の窓より」の最初に「仮寝の後」の題で収められた作品であることは話の内容から見て間違いない」と同定した。——附言すれば、この初出は古峽が主幹となつた日本精神醫學會の月刊誌『變態心理』一九一八年新年號（第一卷第四號）掲載「二狂人」であり、その「一、變質狂」「二、早發痴狂」を、それぞれ「假寝の後」「田舎教師」と改題し分けて、同書に入れたのである。となれば恐らく、二つ目の小説はこの「田舎教師」であつて、漱石が同じく八月二十四日附の芥川龍之介・久米正雄宛書翰で「色々な狂人を書き分けたものだといふ原稿」と言及した「癡狂院の中より」とは「二狂人」の原題であつたらうかと推定される。収録書『變態心理の研究』は題の通り研究書なので、小説といふよりは續く「狂人の手記」十八例と共に

變態心理の症例報告として列べてゐる觀もあつたが、のち二篇とも短篇小説集『變態心理の人々』（大阪屋號書店、一九二六年）に再録された。その際「假寢の後」はまた改題して「うたたねの後」とされてゐる。——だが書誌追跡はこれくらゐにしておき、内容を比較しよう。この二篇の狂人ものを引合ひに出すのは、それぞれに「ゆめうつゝ」と似通ふからだ。

「うたたねの後」（の草稿）を難じて漱石が「さうして最後に突然子を殺すのです。子を殺すのは奇抜です」と批評したその突飛さは、チェーホフの短篇「ねむい」（筒井康隆編『いかにして眠るか』光文社、一九八〇年↓〔光文社文庫〕一九八八年、所收）で、子守りが泣き止まぬ赤子に悩まされた擧句に殺してしまふ卒然たる幕切れの後味を想はせないでもないが——實際もしかしたら古峽はチェーホフを讀んでゐて、自分の得た材料との暗合に興を覺えたのかもしれないが——いま「ゆめうつゝ」と照らせば、これが朱評で「意表外」と言はれ「たゞ狂人と毒薬とに驚かされてあつと曰つたぎり」（栗原古城）と貶されたのと同根なのがわかる。

中村翁宛書翰で漱石はまづ、好い意味での小説らしい感じが乏しいと斷じた上で、「氣狂になる人の心的状態が毫もないので同情が起らないからではありませんか。氣狂になるには氣狂になる徑路がありませう。それが讀者の腑に落ちないでは主人公に氣の毒だとか可哀さうだとかいふ氣は起し得ません」と助言してゐた。同様に「ゆめうつゝ」でも狂人については心的状態が無く外面描寫ばかりであり、『殼』もまた發狂する弟に對しては内面にまで立ち入った視點を殆ど取らないこと、既に述べた。但し「うたたねの後」は、三人稱だが専ら主人公（最後に發狂することになる）の視點を通して語られ、その心裡に内的焦點化はしてゐる。無論それは漱石の講評を受けたのち改稿したものである可能性もあるにはあるが、内的焦點化にも拘らず主人公の心理が飛躍する徑路が遂に釋然とせず、突飛な印象なのは漱石の評した儘なので、さう改めてはをるまい。

だがこの突飛な不可解さ——漱石はこれを排したけれども、これこそを狂氣の味はひとして評價したい。單に、狂人だからわけ解らんのが當然だなどと言ふのではない。「ゆめうつゝ」の狂人のごとく全く外から觀て取つてつけたやうな異狀を體させたのと違つて、「うたたねの後」では主人公の内部に焦點を合せれば彼なりの論理が徹つてゐるのが見られ、しかしそれも突き詰めた所になると畢竟獨り決めの飛躍した理路であつて他者には通じないといふのが、いかにも狂氣らしい——謂はば、狂氣のリアリティーが感じられるのである。乃至は狂つたりリアリティー、現實の狂氣性と言はうか。それは、夢における理窟張つた不條理さ——『夢十夜』のやうな——にも似る。「ゆめうつゝ」（特に〔上〕）にはまだ無かつたこの狂氣のリアリティーは、のち變態心理學（今日謂ふ所の異常心理學）への關心が芽生えて以降に古峽が實際の症例と接してゆく中で獲られたものだらう。

漱石の評に戻れば、その小説らしくないといふのは、初出誌での題や『變態心理の研究』初收時の排列にも見られた通りであった。これは恐らく實話に取材したままモデル離れがしてゐない所爲と覺しい。小説らしからぬのは大抵は作者の稚拙さ故であらうものの、逆に、事實といふものが持つ奇妙なりアリティ―、往々にして小説よりも奇である事實そのものの奇妙さ——お好みならラカン風に現實的なものでても呼ぶべし——を保つてゐる點では、却つて好ましいことがある。むしろ中村星湖などはその『殼』評で「小説らしい形式に囚はれてゐる」ことを缺點に擧げ、「斯様なコンベンションを破つて行かれない」と望んでゐた（前掲『殼』に就いて）。「ゆめうつゝ」（下）でのお重の長臺詞の獨白は、何やら淨瑠璃のくどきか新派の愁嘆場めいて、家庭小説流の通俗味に陥りさうなところもあつたが、下手に小説らしく作らせるとあなつてしまふわけだ。かつては許嫁同士だった兄嫁と義弟といふ人物相關にしる、白狼（森田草平）が後評で示唆する如く廣津柳浪「河内屋」にそっくりその儘でもあるが、現實にも、當時ならありふれたと云はぬ迄もありがちなこと、まして小説では眞似せずとも似やすい陳腐な定型であらう（嫂への道ならぬ思慕といふだけなら、江藤淳の漱石神話にも見られる如し）。その意味で、ここで「小説」といふのは「物語」と呼ぶべきか。「ゆめうつゝ」が弟の發狂以前にそれを豫言するかに見えたとしてもそれは、現實があつて物語に反映されるのではなく、實人生をも物語的定型によつて解して物語として反復してしまふ凡庸さの然らしむる所だったと考へればよいのかしれない。

次の「田舎教師」も、實話臭い。「其頃は、徴兵令が初めて世に布かれてからまだ間もない時のことであつた」とやけに事實の尻尾を残したやうな時代設定があり、誰ぞの昔話を聴き込んで小説に仕立てた節がある。精神鑑定書風に言へば主人公の「生活歴」を記述する如き、一青年が發狂する迄の物語だ。「うたたねの後」の三倍近い六十枚程の長さで、書き込んだ分だけのことはあつてか、散々非を打たれた「うたたねの後」（の草稿）に較べて漱石が「多少の發展がある」「順序がともかくも辿れる」「當人のサイコロジ―の方から見ても外面的に敘述される事實の連鎖からいつてもいゝやうです」と評價するのは頷ける——尤も、もし「田舎教師」（の草稿）をも併せて漱石が見たといふ先の推定が正しければ、の話だが。それに、「比べて見てまだ増しだといふ位なもの」「とても藝術品にはなつてゐない」と、結局漱石からは酷評されてゐる。

この「田舎教師」では、焦點人物はほぼ主人公に固定され、心中思惟を交へた敘述（＝内的固定焦點化）が主である。ところが終盤、いよいよその青年が精神に異状を來し出す段になると、これが言動のみ述べて内心の思考感情を傳へぬ敘法（＝外的焦點化）に移行し、遂にはその焦點人物も移つて様々な他者の視點から（＝内的不定焦點化）主人公の言行は間接的に綴られるばかりとなる。つまり、「う

たたねの後」と比べれば狂人の内側に踏み込んでゐず、その點では『殻』の語り方に近い。「人間は斯くの如くにして狂人に成るものぞと言ひ得る唯一の書」とは森田草平の『殻』評『讀賣新聞』一九一三年七月二十七日。この句は『新小説』一九一三年三月號に載つた單行本の廣告文を少しく改めただけであつたが、狂氣に至る手前迄は辿つても、發狂して理性の境を越えるや、言葉はその核心を迂回して周圍を低徊するばかりとなるわけだ。これは一般論としてもさうだ。シヨシャナ・フェルマンに言はせれば、「つまり、**狂氣を語る**ことは、実のところ、常に**狂氣を否認すること**なのだ」し、「狂氣を表象する（思い描く）ことは「……」、常に**己自身の狂氣を否定**するという**場面**を演じるものとなるのである」とはいへ——「だが、狂氣についての言説が狂氣の言説ではなく、本来的に、狂った言説ではないとしても、こうしたテキストの内には**語る狂氣**が、誰もそこで演じられるものの語る主体となることはできないが、言語を通じてただ一人演じられる狂氣というものが存在することに変わりはない」。フェルマンが「レトリックの狂氣」と名づける存在だ。即ち、狂氣（について）のテキストにはまたテキストの狂氣が存するのであつて、「**狂氣を語りながら、狂氣を行為化し、まさに、「狂氣を語ること」と「語る狂氣」との遭遇**を行爲として示すのである」『狂氣と文學的事象』土田知則譯、水声社、一九九三年、548頁以下）。蓋し、作中で對象とする狂人の狂氣とは別に、**遂行的な語る狂氣**、語ることそれ自體の狂氣が在るだらう、と。

ここで興味深いのは、「田舎教師」の終末部を占める主人公の兄の視點である。弟に異常な徴候が現れたことを妻から聞かされた兄はそれを本氣にしようとせず、叔父から忠告されても、狂人扱ひにするなんて失敬な、と却ける。弟を養子入りさせた後、その近所の姉婿から行狀を知らされても「叔父の話にかぶれた」と見做し、さらに弟の養父から急報が届いても、彼までがまたかぶれ出したなど言つて立ち上がる。そしてそこで、これまた不意にぶつりと切れたやうに「田舎教師」一篇は結ばれるのだ。この結尾、實弟發狂の事實を飽くまで聞き容れようとしなない餘りに頑固な否認ぶりは、偏執的でむしろ兄の正氣を疑はせかねない。狂氣を否認する狂氣。最早どちらが狂人だかわかつたものではない氣分にさせられる點で「ゆめうつゝ」（下）のお重と似通ひ、それがまた狂氣の傳染みたいで奇妙な後味を出してゐる。結句の、突然中斷したやうな幕引きは、ここから弟ではなく兄といふ別の狂人の物語が開幕する豫感さへ漂はせよう。さういへば『殻』にはこんな一節があつた。主人公である神田稔、狂人の弟を持つ兄の、心内文（心話文）である。

偶と又他の物語が胸に浮んだ。——さる男が戰爭に行つて氣狂になつて歸る。懊惱の極終に死んでしまふ。すると今まで彼を

看護してゐた弟が、又兄と同じやうな氣狂になる。——これが其物語の筋であつた。

「兄貴が氣狂になつて、又弟が氣狂になつた。兄弟とも氣狂になつて終つた！」

斯う考へて、稔は我知らずぶる／＼と顛へながら、往來の眞中で佇立つた。

「俺も最後には……」彼は最早其の後を考へるに堪へなかつた。

さらには、狂氣の傳染が讀み手までをも巻き込んでゆくとすれば……。狙つたものとも思へないが、捨てるには惜しい味で、もつと意識して狙つてみる價值はあつたらう。狂人ものの小説といへば夢野久作『ドグラ・マグラ』（初版一九三五年）が金字塔であつて、あれも、「これを讀了した者は、數時間以内に、一度は精神に異常を來たす」等と角川文庫版の帯文に謳はれてゐたけれども、それは誇大廣告といふもので、むしろ『ドグラ・マグラ』はよく練つた構成を持つ理詰めの作であり、精神病院にゐる主人公（≠吳一郎）も理知的であつて殊更狂氣染みた言動も見せず、入れ子仕掛けに惑はされずにちゃんと讀めば格別不可解な所は無い。對して中村古峽の狂人ものでは、『殻』を除く「ゆめうつゝ」「うたたねの後」「田舎教師」等、作者の小説技術の未熟さ故ではあれ、何か辻褄の合はないモヤモヤした感じが残つて、後を引く。敢へて言はば、その狂氣のリアリティーと組み合せた狂氣の感染力に、魅力と可能性があつたと考へる次第。「ゆめうつゝ」をその後の諸作と突き合せればそんな風に讀めたのだが、如何。生憎と、中村古峽當人にはその可能性を作品に具現できる文體が無かつたにせよ、だ。——フェルマンは、狂氣（についての）テクストが顛覆された所に「テクストの狂氣（修辭性）」が位置すると言ふ。狂氣を語ることと語る狂氣との出會ひ。「狂氣のレトリック」を顛覆させるのが「レトリックの狂氣」である、と。だから恐らく、レトリックの狂氣を存分に發現させるには、狂氣（についての）レトリックが顛覆されるに足るだけ充分に備はつた文章でなければなるまい。

ところでこの「ゆめうつゝ」に對し、『夕づ』同人中ひとり熱烈に支持してゐたのが白狼ことこの森田草平である。欄外評で「心に忘れ兼ねたる古傷ある我は、思はず巻を蓋ふて泣けり」（*19）と書いてゐるのも筆蹟からどうやら白狼らしいが、「古傷」とは氣になる言ひ方、早熟で女性經驗に富んでゐた草平が過去の戀愛を想ひ出したといふだけでは足りまい。なぜそんなにも感動したのかと怪しまれる程で、これはもう森田草平論に讓るべき課題だらうが、中村古峽とは狂氣への關心が共通したことは注意しておきたい。中村古峽は一九四五（昭和二十）年の敗戦後、森田草平と屢々書信をやり取りして舊交を温めてをり、それで草平は戦後版

『輪廻』（飛鳥書店、一九四六年↓複製、本の友社、一九九八年）の「跋」（一九四六年七月二十四日附）を、「最近舊友中村古峽から」當時君から貰った輪廻をこの終戦後になつて初めて読んでみた。あれは君一生の傑作だよ」と云つて来た」云々と書き出してゐる。續けて曰く、

もう一つこの作には中村君の氣に入るやうな所がある。それは遺傳と異狀神経のやうなものを取り扱つてゐるからに外ならぬ。大學時代、私と中村君とは共に精神病學に興味を有つて、文科の學生でありながら、その頃巢鴨にあつた吳秀三博士の精神病學教室に通つたものだ。それが病みつきで、同君はたうとうその方の専門家になつてしまつた。私はさうも行かなかつたが、この作はいさゝかその頃の名残りを留めてゐるものである。[…]

古峽には一高から東大へ進學した後に實弟が精神病を發した事情があつたが、森田草平の場合は、何故の精神病院見學だつたらう。「ゆめうつゝ」に對する禮讚^レぶりを見るに多分、深刻小説的な主題群への執着があり、その一つに狂人への興味もあつたといふ所か。草平の『輪廻』（新潮社、一九二六年初版）は自傳的長篇で、天刑病で死んだ父を持つ青年が遺傳の恐怖に苦惱するが遂に母の告白により自分が不義の子で父の血を享けてないことを知るといふ筋、いささか深刻小説風ではある。有名な『煤煙』以上の傑作と評價する向きもあるが、但し、傳染性である癩（ハンセン病）を遺傳病と做す偏見、母親の姦通で救はれるといふ解決の御都合主義等につき、夙に大西巨人の批判がある（ハンセン氏病問題 その歴史と現実、その文學との關係『新日本文學』一九五七年七月號〜八月號↓改題「ハンセン病問題」『大西巨人文選 2 途上 1957.074』みず書房、一九九六年）。強ひて結びつけられれば、かつては精神病も癩病も共に、人に忌み嫌はれ身内からも恥ぢられ、業病とされ遺傳を怖れて家系ごと差別され、不治とされ長期入院生活を強ひられ……等々の點で相通するものではあつた。向精神薬や抗生物質の導入により事態が好轉しかけるのは敗戦後になつてである。それまで（イヤいまだに？）、文學における「隱喩としての病」（スーザン・ソントグ）では結核に次ぐ位地を占めてゐたと言へる。「宿命や運命あるいは「血」に関わる苦惱の象徴としてのイメージ」ゆゑに「近代文學の格好の素材となる」といふわけだ（奈良崎英穂「癩」∥「遺傳」説の誕生——^{ダイワニズム}進化論の移入と明治文學『日本近代文學』第63集、二〇〇〇年十月）。森田草平『輪廻』も亦然り。

この白狼ほどではないが、星郊こと生田長江の「ゆめうつゝ」への評語も他の同人からの批難を回護する風があり、「成程是は設

計がちと大き過ぎた爲めに作者が持てあましてる様が見える」と破綻は承知しつつも「何となく捨て難い」と認め、「是は或は此中のある事から聯想して古き記憶でもそれとなく自ら呼び起したせいかも知れぬ」と思はせぶりなことを記す。先の「古傷」にも似て、結婚を誓った筒井筒でもあったのか、それとも……と憶測を逞しうさせられる。ついでながら、長江が癩病罹患者だったことに就ては同病の立場から調べた島比呂志「宿命への挑戦——生田長江の生涯」『「らい予防法」と患者の人權』社会評論社、一九九三年）があるが、これは表立って言明こそされぬものの文壇では公然の祕密だったことで、すぐ思ひつく限りでは例へば橋爪健の回想「狂い咲き島清」しませい（『多喜二虐殺』新潮社、一九六二年）における記述がある。一方、その長江の友人である森田草平はどうか。両者を対照させた武田徹は、『輪廻』で「森田が癩を主題に選んだのは、生田の病氣を知っていたからかもしれない。そうでないかもしれない」と詳らかにしないが（『「隔離」という病い 近代日本の医療空間』《講談社選書メチエ》一九九七年、216頁）、森田は生田に就て「同君は人も知るやうに、生れながらにして重き荊棘を背負つてこの世へ出て來た不幸な人である」云々と婉曲ながらも述べてをり（『續夏目漱石』甲鳥書林、一九四三年、727頁）、遺稿「漱石についての雑録」（『森田草平選集 第四卷 月報 3』理論社、一九五六年九月）では「癩病」と明言してゐる。また恰度『輪廻』の連載『女性』一九二四年十月號〜一九二五年十一月號）終了直後の一九二五年十二月、長江の病狀惡化を案じた慰安會・表彰會が飽くまで病氣は名目に立てぬやうに配慮して企圖されたが、この時に文壇諸家から参加・不参加の返事を得た書信一束を中村古峽が遺してゐて、幹事か事務方でも務めたものらしい。當然森田草平も發起人に加はって舊友の發病を知らなかつた筈も無いのに、それにしては『輪廻』での癩病イメージはあまり酷薄で、自分さへ癩の恐怖から解放されれば後は知らぬと言はんばかりだった。そこでは「ハンセン病は単に哀れを誘う舞台装置でしかない」（武田徹）。森田本人にとつても『煤煙』以來仄めかしてきた自傳上の主題で出生の祕密は切實だったらうにも拘らず、猶かかる「感傷主義」（大西巨人）に陥るのは、やはり小説作法が説話論的定型に囚はれてゐる所に問題がないか。

かうした後年の『夕づゝ』同人の三者三様を對照してゆくと、「ゆめうつゝ」をめぐるやり取りにまで遡って何やら物語めいた構圖に収めたくなる誘惑に驅られぬでもないが、しかし、これ以上はもはや餘談に過ぎよう。ご想像に委せおく。

翻刻・註釈・解題（執筆順）

樋渡隆浩

杉尾志帆

加藤 大

甘利香織

大城奈央

八木 淳

趙 秀娟

鈴木孝尚

鈴木理香

森 洋介

金 未耶

青木裕二

翻刻・註釈・解題 『夕づゝ』 第四号

2005年3月31日 初版第一刷発行

著 者 森田米松・生田弘治・中村蒨・栗原元吉・五島駿吉

編 者 日本大学大学院文学研究科 『夕づゝ』 翻刻の会

発行者 曾根博義

発行所 日本大学大学院文学研究科 曾根博義研究室

〒156-8550

東京都世田谷区桜上水 3-25-40

日本大学文理学部国文学科

電話 03-5317-9706

FAX 03-5317-9219

Mail kokubun@chs.nihon-u.ac.jp